

ICT活用のためのリテラシー向上に関する検討会（第7回）
※青少年のICT活用のためのリテラシー向上に関するWG（第4回）合同
議事概要

1 日時

令和5年4月27日（木）15:00～17:00

2 場所

WEB会議による開催

3 議題

(1) 開会

(2) 議事

① AIを賢く使いこなすためのリテラシーの在り方について

② 今後の取組の柱を整理したロードマップ（案）について

(3) 閉会

4 出席者（敬称略）

(1) 構成員（座長及び座長代理を除き五十音順）

山本座長、中村座長代理、石田構成員、上沼構成員、尾上構成員、尾花構成員、齋藤構成員、坂本構成員、佐和構成員、瀬尾構成員、曾我部構成員、豊福構成員、富永構成員、中川構成員、古田構成員、森構成員、安野構成員、米田先生

(2) オブザーバー

Facebook Japan株式会社、LINE株式会社、グーグル合同会社、ヤフー株式会社、株式会社NTTドコモ、KDDI株式会社、ソフトバンク株式会社、楽天モバイル株式会社、（一社）電気通信事業者協会、（一社）テレコムサービス協会、（一社）全国携帯電話販売代理店協会、（一社）安心ネットづくり促進協議会、（一財）マルチメディア振興センター、（一社）モバイル・コンテンツ・フォーラム、（一社）ソーシャルメディア利用環境整備機構、アルプスシステム インテグレーション株式会社、デジタルアーツ株式会社、こども家庭庁、デジタル庁、文部科学省

(4) 発表者

日本マイクロソフト株式会社

(3) 総務省

【情報流通行政局】植村審議官、田邊情報流通振興課長、赤間情報活用支援室長、加藤同室課長補佐

【総合通信基盤局】廣瀬消費者行政第一課長、竹内同課課長補佐

5 議事概要

(1) 開会

事務局より、ウェブ会議による開催上の注意事項の案内、配布資料の確認を実施。

(2) 議事

① AIを賢く使いこなすためのリテラシーの在り方について

日本マイクロソフト株式会社より、資料7-1に基づき説明を行った。主な質疑応答、意見の概要は以下の通り。

(質疑) AIを効果的に活用するリテラシーの重要なスキルの例として、プロンプトエンジニアリングが挙げられており、リテラシーを教えていく上では重要な柱になると思うが、現状として体系的な方法論や教える内容は定まっているのか。

(応答) 今現在、プロンプトエンジニアリング等利用に係るフレームワークについて、特定のものが出来あがっているわけではないが、教育分野でAIをどのように生かしていくのか、学校やその他の教育機関等と一緒に作り上げていこうとしているところである。

(質疑) 既にAIのプロダクトへの導入は始まっていると思うが、AIの普及のスピードが速いことに鑑み、リテラシーやリスクをユーザーに共有する仕組みはプロダクト内で何か考えているのか。

(応答) Bingについて言えば、公開する人数、ユーザー数を絞ってトライアルから始めており、実際の使用例を収集し、AIがどのように利用されるかについて情報を集めていきたいと考えている。

(質疑) 「フレームワークはリスクベースで、アウトカムベースであるべき」と資料にあるが、リスクベースやアウトカムベースは人によって内容が違うこともあるので、マイクロソフト社が考えるルール形成の在り方について、具体的なルール形成のあり方について教えてほしい。

(応答) リスクベースやアウトカムベースという表現は、原則を書き並べて、そういうものがあるんだということ、話を進めていくということの対立概念として記載している。規制の議論もプラクティカルであるべきであると考えており、より具体的に、どのような場面で、どういったリスクがあって、それに対してどのような制御が可能なのかという議論をしながら規制の議論をしていくべきであると考えている。

○AIリテラシーについては、活用するリテラシーと安全に使うリテラシーの2つについて重要性を言及していたが、ユネスコの立場からいうと、社会的な影響を考えるリテラシーも入れた方がいいのではないかと思う。AIは社会生活に多く使われているが、子どもたちはそのことをほとんど知らない。そのため、子どもたちは自分がAIやアルゴリズムにどのような影響を受けているのか考えることは大事だと思う。(坂本構成員)

○通常ChatGPTにおいて引用元を示すよう指示しても、その引用が間違っている場合もあるが、BingのAIはリンク元が表示され、参照できる点がよいと思う。また、AIは自分の思考を広げることに役立つが、それに頼りすぎることは良くないことであり、批判的な思考が必要であると思う。(齋藤構成員)

- (質疑) AIを使うことによって教育の可能性が広がるというご発言があったが、ICTを使うことによって広がるインクルージョンとAIを使って広がるインクルージョンの違いについて説明してほしい。
- (応答) 例示になるが、教員がジェネレーティブAIを使うことによって、脳疾患があるような生徒たちに対してもエンゲージメントを高めながら教育を行うことができる。こういったことは大きな教室において個々の生徒に合わせた指導が難しい場合においても活用ができるのではないかと考えている。
- (質疑) 学校等において直接的に学ぶ機会が少なくなっている世代は、パソコンやスマートフォンが出す回答は必ず正解であると受け止めてしまう人が多いと思うが、そのような人に対して今後取り組む事項や、日本で今まさに仕掛かりがある取組があれば教えてほしい。
- (応答) 本件についてはまさにこの検討会で議論している部分であると考えており、ロードマップを踏まえて一緒に実施できればと考えている。(資料7-2) 16ページにおける「デジタル空間において安全を確保する能力」に違法・有害情報や偽・誤情報のリスクを理解し対処すること、という文言があり、この中にAIの回答といったところもスコープにいれてカバーしていければ良いのではないかと考えている。

② 今後の取組の柱を整理したロードマップ(案)について

事務局より、資料7-2に基づき説明を行った。主な意見の概要は以下のとおり。

○欧州の議論では、AIが行政システムや教育の評価に利用されることについて、AIによる判断や差別が課題になってくるという指摘がある。そのときに、自分で決められる自由を損なわせるという意味での他律からの自由が権利として認められるべきだと述べられており、この点は重要であると考えている。(豊福構成員)

○(資料7-2) 11ページにデジタル社会形成基本法が明記されたのはとても良い。あとはこのページに「誰一人取り残されない」、「人に優しいデジタル化」といったわかりやすい言葉をちりばめるとさらに良いと思う。

また、対象セグメントについて青少年と青年層を分けているが、一般的に国際機関では15歳から24歳までのユース世代として括ることが多く、ユース世代を対象とした取組が非常に多い。ユネスコやメディアとの連携を考えるならばユース世代として括る方が良いと思う。(坂本構成員)

○(資料7-2) 12ページで子育て層という呼称で30代から50代で括っているが、日常的にこどもに接しているという観点でもう少し層を広く捉えた方がよいのではないかと考えている。

また14ページの「基礎的なインターネットの仕組みについて理解が不十分である」について、“基礎的な”という表現よりも“ICTを利活用するために必要な”として、ICTを利活用する際に知っておかないとトラブルに巻き込まれてしまうといったニュアンスを出した方がよいのではないかと考えている。

最後に20ページの教える人材について。2025年から大学1年生になる人は基本的には「情報」を履修してきているので、彼らを取る教職課程の科目にもICTリテラシーを

組み込む等、デジタル・シティズンシップ教育を担える新たな教員の育成について省庁を超えて検討してほしい。(尾花構成員)

○本来的に目指すリテラシー像はA I等新しい技術が出てきたときにも慌てずに対応できる能力をつけることだと考えている。そういった観点から(資料7-2)14ページの世代共通課題(1)は「インターネット上で情報が提供される特性・仕組みの理解」とすれば、A Iに関する課題も含めることができるのではないかと思う。

また23ページについては、青少年に対する環境整備、技術的保護は今後も必要な取組であるが、「継続的取組事項」が具体的に何をするのか分からないため、今後の青少年ワーキンググループで議論していきたい。(上沼構成員)

○ICTを利活用するために重要なことは、インターネットがどういった技術的な仕組みによって作られているかということへの理解であり、そういった意味で、(資料7-2)14ページの「基礎的なインターネットの仕組みについての理解が不十分である」という表現は重要である。インターネットの基礎的な仕組みについて知らないと安全に使えないという考え方がデジタル・シティズンシップだと言える。

(森構成員)

○(資料7-2)10ページのフレームワークにおける「場所」について、これまでもネット空間の重要性について指摘されているため、リアルな空間だけでなくネット空間も含めるべき。

また、12ページの優先セグメントについて、3つのセグメントの中にも優先順位があるならば、高齢者を優先とすべきで、この3つで優先順位はないというのであれば、価値観を示すという意味でも優先順位をつけるべきと考える。

最後に23ページ、届け方の検討が中長期的取組事項となっているが、短期的な取組において届け方の議論があった上で、並行してコンテンツ開発を進めるべきではないか。

(瀬尾構成員)

○習熟度に対する指標の策定にあたっては、実態調査で正確な実態を把握できることが重要。

また、プラットフォーム事業者等ですでに公表されているコンテンツで有用なものはたくさんあると思うので、ポータルサイト等においてそれらを取りまとめることも重要である。(石田構成員)

○“子育て層”という表現の仕方についていくつか言及があったが、国際機関の報告書を見るとParents、Guardian、Caregiverという形で並列して書いてあり、その点から考えると海外では、こどもの育成、こどもの保護に関わる人全般を指して、こどものインターネット環境を考える方針であると思われる。(齋藤構成員)

以上